

時評

高山 靖子



対AI 人間が優位を保つには

## データより感性、哲学を

世界デザイン会議が10月27日から29日までの3日間、東京都内で開催された。世界各地のデザイン関係者に加えて環境、コミュニケーション、科学技術など幅広い分野の専門家が参加し、デザインの新たな役割や可能性について議論した。日本開催は、世界デザイン機構(WDO)の前身である国際インターストリアルデザイン団体協議会(ICSID)が1973年に京都で、89年に名古屋で開催して以来34年ぶり3度目である。

日本では戦後にカタカナの「デザイン」という言葉が使われるようになったが、一般的には「意匠いしょう」と解釈され、エスティック(装飾的)な部分ばかりが注目されてきた。しかし、世界デザイン会議の記録をひもとくと、当初から「人の心とモノの世界」や「情報化の進展とデザインの拡大」について議論していた。近年ようやくエスティックに至る前のプロセスにもスポットライトが当たるようになり、デザイナ

一の考案プロセスである「デザイン思考」もビジネス界で注目されている。

これについてはうれしく思う部分もあるが、デザイン思考は賛否両論を呼ぶバズワード(定義があいまいなまま広まってしまった用語)でもある。その原因の一つは、デザイン思考が魔法のように扱われ、これさえあれば革新的なイノベーションを起こせるという誤解を招きかねないところにある。京都産業大学の森永泰史教授は、デザイン思考は全く新しい手法ではなく、その多くはマーケティングの分野で用いられてきたとして、既存の手法と比較・整理している。他のマーケティング研究者によっても、マーケティング手法、デザイン思考の手法ともに、ある過程においては有効ではあるが、全ての新しい発想を生み出すことには限界

があると述べられている。

さて、ここで最近話題の生成系人工知能(AI)に思いを致す。デザイン思考のために開発されたさまざまな手法がイノベーションの再現に有効であるならば、AIが人間の手を介さずにイノベーションを起こすことが可能となる。本当にその日は来るのだろうか？

AIはデータを分析する能力にたける。同じ情報ソースでは人間には分が悪い。人間が優位を保つためには、AIが拾えない現象を収集し、良しあしを判断する力をつけるべきだろう。つまり、データになる前に感じ取る感性と望む未来へ向かう哲学を持つことが必要なのだ。まずは、スマホを見て時間をつぶすのではなく、スマホを見る人を見ようではないか。

(静岡文化芸術大デザイン学部教授)

たかやま・やすこ 1966年、愛知県生まれ。同県立芸術大美術学部卒。東芝デザインセンター、同大非常勤講師などを経て2007年に静岡文化芸術大着任。15年から現職。専門はプロダクトデザイン、デザインマネジメント。芸術工学博士。トルコ・イズミル経済大などとの国際交流もライフワークとする。

2023年12月13日

静岡新聞(朝刊) p.6